

犬の気管虚脱に対する気管内ステント留置

城下幸仁（しろした ゆきひと）相模が丘動物病院・呼吸器科

犬の気管虚脱は、気管軟骨の脆弱性素因のため、後天的に気管が扁平化し喘鳴症状を引き起こす疾患である。ヨークシャテリア、チワワ、ポメラアンに好発する。近年、犬の重度気管虚脱の治療に自己拡張型金属ステントの気管内留置が行われるようになってきたが、長期観察研究は少ない。6年間の演者の経験では10/13例は転帰良好で、7例は経過観察中である。今回、長期観察中の1例を示す。症例は、ヨークシャテリア、メス、5歳。体重3.4kg。前夜、重度の喘鳴、チアノーゼ、失神を呈し、夜間動物病院にて重度気管虚脱と暫定診断された。翌朝、気管内挿管したまま当院紹介受診となった。即日、気管支鏡検査にて完全気管虚脱と診断し、気道確保のためTチューブを留置した。2カ月後、Tチューブを抜去し金属ステントを留置した。その後4年間合併症も喘鳴もなく過ごしている。獣医療ではステント留置の経験は少なく、ぜひ御指導ください。